

審 査 結 果 の 要 旨

報告番号	乙 第 2892 号	氏名	坂井 健介
審 査 担 当 者	主 査	山 木 宏 一	(印)
	副主査	明 石 莫 俊	(印)
	副主査	高 須 修	(印)
主論文題目： Primary Hinged External Fixation of Terrible Triad Injuries and Olecranon Fracture-Dislocations of the Elbow (テリブルトリアド損傷ならびに経肘頭脱臼骨折に対する一期的ヒンジ付き創外固定法)			

審査結果の要旨（意見）

不安定型肘関節脱臼骨折の治療では安定性と可動性の獲得が重要となる。安定性を獲得するには骨折の強固な固定に加え靭帯の修復が必須となるが、術後拘縮のため可動性を犠牲にする危険性もある。また、可動性を重要視すると不安定性、偽関節を併発する恐れもあり従来の治療法では両方を十分獲得するいい治療法がなかった。今回の創外固定を使う治療法は今までにない小侵襲で、この2つの要素を同時に獲得できる画期的な治療法で過去に同様な報告もない新しい方法である。

治療が非常に難しい不安定型肘関節脱臼骨折に対して、この創外固定を併用した治療法は新しい画期的な治療法として重要で、学位論文としてふさわしいと思われる。

論文要旨

Terrible Triad Injury あるいは経肘頭脱臼骨折に代表される不安定型肘関節脱臼骨折の治療は不安定症や拘縮といった重篤な問題を後遺しやすく非常に難治性である。2004年 Pugh らが一期的に骨接合および靭帯再建を行うという治療戦略を提唱して以来、その治療成績は向上してきたものの、key stone とされる鉤状突起骨折に関してはその多くが tip fracture の形態となっており、現実的には骨接合困難なことも多く、lasso suture technique による関節包靭帯の安定化が代用されているが、手術侵襲の問題とともに手技の煩雑さも含めて未だ困難を要しているのが現状である。

今回、我々は橈骨頭骨折および肘頭骨折の骨接合を行い、原則的に鉤状突起骨折ならびに側副靭帯損傷に対する処置は行わず一期的な創外固定器装着下の術後早期リハビリテーションを行う治療戦略を施行したが、その 11 例の治療成績はこれまでの報告に比べ良好な成績を収得られ、さらには特記すべき合併症も認められなかった。本法は術式の簡略化とともに肘関節の良好な可動性と安定性を一回の手術で獲得できる可能性が示された。